

# 社交不安が視覚的注意の制御に及ぼす影響

## —注意の解放と定位の観点から—

鈴木 孝

本研究では、社交不安傾向者の注意バイアスについて検討し、社交不安症(SAD)への心理学的援助に向けて示唆を得ることを目的とした。これまでに、注意を定位、解放、切り換えという三つの要素に分解し、社交不安傾向者の注意バイアスについて検討が行われてきたが、まだ十分ではない。注意の解放に関しては、社交不安傾向者で脅威刺激からの注意の解放が遅れることが示されているが、意図的に社交不安を喚起することで同様の結果が得られるかについては検討されていない。そこで実験 1 では、社交不安を意図的に喚起する操作を加え、脅威刺激からの注意の解放について検討した。注意の定位に関しては、社交不安傾向者で脅威刺激への注意の定位が早くなるという知見がある。そこで実験 2 では、注意資源の配分方略という観点から、脅威刺激への注意の定位について検討した。

実験 1 では、Moriya & Tanno (2011)で実施されたギャップ・オーバーラップ課題を模式的な表情刺激を用いて実施した。社交不安尺度(BFNE)の得点に基づき、実験参加者を社交不安高群と社交不安低群に分類した。また、実験参加者のうち半数に対してはビデオカメラによる撮影と否定的な評価に関する教示を行い、実験群とした。残りの半数に対してはそのような操作を行わず、統制群とした。社交不安高群では中性顔よりも怒り顔が呈示された場合で、注意の解放が遅れが生じると予想された。また、実験群では社交不安が喚起されるが、社交不安高群では注意の解放の遅れが増大する一方、社交不安低群では注意の解放の遅れは見られないと予想された。注意の解放の遅れの指標として、オーバーラップ課題の反応時間からギャップ課題の反応時間を減算し、差分得点を算出した。その結果、社交不安高群では中性顔よりも怒り顔が呈示された場合に差分得点が大きかったが、社交不安低群では中性顔と怒り顔が呈示された場合で差分得点に差は見られなかった。一方、実験条件による影響は認められなかった。これらの結果より、社交不安傾向者における注意の解放の遅れは実際の表情だけではなく、模式的な表情刺激を用いた場合にも生じることが明らかになった。また、社交不安を喚起する操作が不十分であったため、より妥当性の高い手法を用いて再検討する必要性が示唆された。

実験 2 では、野畑ら(2007)で実施された有効視野課題を実際の表情を用いて実施した。社交不安尺度(SPS,SIAS,BFNE)の得点の合計値に基づき、実験参加者を社交不安高群と社交不安低群に分類した。有効視野課題の後に記憶課題を実施し、有効視野課題中に呈示された表情の再認を求めた。社交不安高群では脅威刺激に対して視覚的注意を多く消費し、有効視野課題で画面の中央に怒りや侮蔑の表情が呈示された場合で、画面の四隅に呈示される数字刺激の検出率が低くなると予想された。また、社交不安高群では、記憶課題で怒りや侮蔑の表情に関する正答率が高くなると予想された。その結果、社交不安は数字刺激の検出率および記憶課題の正答率のいずれにも影響せず、注意の定位および刺激処理の段階では社交不安傾向者に特有のバイアスは存在しない可能性が示唆された。

実験 1 および実験 2 の結果より、社交不安傾向者は脅威刺激からの注意の解放が遅れを生じる一方、脅威刺激への注意の定位に関しては非傾向者との差異がない可能性が示唆された。したがって、SAD 患者への注意訓練として、脅威刺激からの注意の解放を効率的に行えるようなプログラムを実施することが重要であると考えられる。加えて、実際の表情ではなく模式的な表情刺激を使用することで、より実践に即した手法で社交不安の軽減を図ることができる可能性が示唆される。(応用認知心理学)